

書 評

『がんとがん保険』新版

がん保険基本マニュアル

佐々木光信 著

除に関する「基礎資料」「教科書」である。以下では、本書の特徴および構成等について、本書で新たに追加された内容を中心に、若干の感想も加えながらその意義について述べたいと思う。

超高齢社会となった日本において、2人に1人ががんに罹患(りかん)し、3人に1人ががんで死亡している。がんとは、はたしていかなる病なのか。日本人の死亡原因の1位を占め、多くの人が恐れを抱く「がん」を、さまざま

な視点から最新のデータに基づき解説しているのが本書である。初版の2015年からおよそ4年、がん医療は大きく前進した。18年に

ノーベル医学・生理学賞を受賞した京都大学の本庶祐特別教授によるがんの免疫療法についてのニュースは記憶に新しい。また、ここ数カ月間に

しかしながら、がんという疾病、そしてそれを保障するがん保険についてわれわれはあまりにも知らないことが多く、ごく一部の情報に翻弄(ほんごう)

本書は全体として、第I、II章でがんの概要を把握し、III章の商品考察からIV章のがんの定義を経て、保険契約としてのがん保険についての解説

がんを理解することができるのである。各節の頭には、内容のまとめ、目当てがあり、重要箇所は太字で表示されるなど、通読にも、必要項目を探すにも便利なよう配慮され、読者の知りたい情報にアクセスしやすく構成されている。

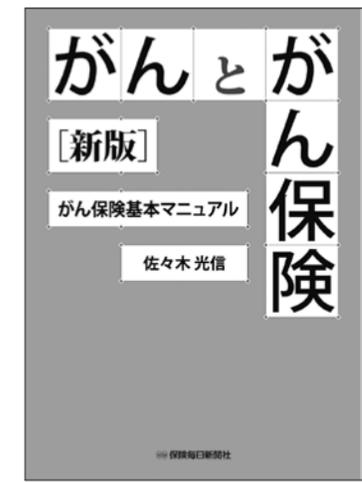
前半の第I章から第III章では、がんを取り巻く環境とその変化について、国の取り組みや、がん保障の沿革、各種商品についての考察がされているが、本書で特に注目されるのは、治療の高額化、がんゲノム医療、そ

がんゲノム医療については前にも述べたが、国が推進していることもあり、今後、とりわけ保険に携わる者は、ゲノム・リテラシーが必要であることが指摘されている。同時に、医療技術の進歩は、治療への新たな可能性を開いてくれるが、患者自身の自己決定権の重要性も示している。さらに、今後一層重要になっ

てくるのが、がん治療と就労の問題である。両立の難しさは、がんサバイバーのみならず、治療を要する病を抱えた多くの人が直面するものである。それを受け入れる企業にも多くの課題があるだろう。

第IV章「がんの定義」は、本書の中核的位置づけであると考えられる。前半部の「医学上のがん」と後半部の「約款上のがん」を判断する基準はまさに、ここで述べられる「がんの定義」によるからである。本章ではまず、WHOのICD-11(国際疾病分類)への改訂とその影響について病理組織型による細分類が導入されることが紹介され、これにより、ICD-10よりも約款との整合性が高まることが示された。従来、医学上のがんと約款上のがんが異なることで、消費者の混乱

さまざまな視点から最新のデータに基づき解説



も、がんゲノム医療に関して公的医療保険適用のニュースや、拠点病院の選定等、がんを取り巻く状況は更新され続けている。医療は常に進歩するものであり、だからこそ常に最新の情報にアクセスできる環境は重要である。

という流れでまとめられている。すなわち、疾病ん保険基本マニュアル」として、保険商品として、契約としてのがん保険を知ること、現在の

という流れでまとめられている。すなわち、疾病ん保険基本マニュアル」として、保険商品として、契約としてのがん保険を知ること、現在の

がんゲノム医療に関する費用は、オプジーボや抗がん剤のような直接費用、そ

がんゲノム医療については前にも述べたが、国が推進していることもあり、今後、とりわけ保険に携わる者は、ゲノム・リテラシーが必要であることが指摘されている。同時に、医療技術の進歩は、治療への新たな可能性を開いてくれるが、患者自身の自己決定権の重要性も示している。さらに、今後一層重要になっ

てくるのが、がん治療と就労の問題である。両立の難しさは、がんサバイバーのみならず、治療を要する病を抱えた多くの人が直面するものである。それを受け入れる企業にも多くの課題があるだろう。

第IV章「がんの定義」は、本書の中核的位置づけであると考えられる。前半部の「医学上のがん」と後半部の「約款上のがん」を判断する基準はまさに、ここで述べられる「がんの定義」によるからである。本章ではまず、WHOのICD-11(国際疾病分類)への改訂とその影響について病理組織型による細分類が導入されることが紹介され、これにより、ICD-10よりも約款との整合性が高まることが示された。従来、医学上のがんと約款上のがんが異なることで、消費者の混乱

契約当事者間の情報の非対称性、各規定の論点整理や整合性など、解決できていない問題が多いことをあらためて認識させられる。また、がん保険特有の規定としての、復活時無効規定の制限的適用という民間保険の宿命ともいふべき課題も示されている。

本書は、『がんとがん保険』であるが、人の生き方に関わる内容である。医療、保険の問題はもちろん、政治、経済、法律、QOL等、実に幅広い視点から書かれている。本書は、第IV章「がんの定義」を中央に据え、前半部分は、保険契約関係者の基礎資料として、後半は、特に消費者に向けて、必要な保障は何かを知り、選択する力を与えてくれる。そうした意味でも、契約の当事者、関係者のみならず一般読者も含めた幅広い人々の必読書になると思われる。(A5判/336頁、保険毎日新聞社刊、19年6月発行、本体価格3600円十税)

[評者] 千々松愛子(鎌倉女子大学家政学部准教授)